

20) 過去10年間の肺良性腫瘍症例の検討

八木 伸夫・矢沢 正知 (長岡赤十字病院胸
富樫 賢一・佐藤 良智 (部心臓血管外科)

当科における過去10年間に経験した肺良性腫瘍51例について、type, 年齢, 性別, 診断方法, 大きさ, 臨床症状の有無, 治療法の選択等について検討した。また, 末梢肺野に孤立性に発生した乳頭腫の1例も経験したので併せて報告する。

21) 左胸骨後横隔膜ヘルニア (Larrey 孔ヘルニア) の1幼児例

大沢 義弘・岩淵 眞
内藤 真一・内藤万砂文 (新潟大学小児外科)

先天性横隔膜ヘルニアのうち胸骨後ヘルニア (Morgani 孔ヘルニアと総称されることも多い) はその3%を占める稀なものである。特に左側のものは Larrey 孔ヘルニアと呼ばれる胸骨後ヘルニアの10~30%を占めるにすぎない。

症例は3才の男児, 生来嘔吐し易かった。1992年1月腹痛, 嘔吐があり小児科を受診。左胸部にて腸雑音を聴取されたため胸部レ線撮影され本症が疑われた。

1月30日手術施行, 左胸骨後部に 2.7×1.5 cm 大の横隔膜ヘルニアがあり, 上行結腸が陥入していた。ヘルニアのうが存在しその一部を切除したのち, 2層に縫合閉鎖した。

22) 肺アスペルギルス症を合併した気管支原性囊胞の1例

渡辺 健寛・飯沼 泰史 (秋田赤十字病院
三浦 宏二・高野 征雄 (外科)
藤田 康雄 (同 胸部外科)
大和 靖 (新潟大学第二外科)

症例は5歳女児。1990年8月咳, 発熱で発症。近医受診し, 胸部X線写真上, 左下肺野に異常陰影を認めたため当科紹介受診。保存的治療を行い症状改善したため, 経過観察となった。1991年6月頃より頻回に咳, 発熱が出現し, また, 異常陰影が増大傾向のため, 手術の方針とし当科入院。1991年8月22日手術施行。S9-10に径6cmの腫瘍を認め, 肺部分切除術を施行。又, 大動脈から直接S10に流入する血管を認めたため, 結さつ切離し手術を終了した。腫瘍内部には膿汁が充満しており, 細菌検査でアスペルギウスが証明された。又, 腫瘍内腔には気管支上皮が認められ, 気管支原性囊胞と診断された。

23) 多発性肝血管内皮腫の1例

新田 幸壽 (新潟市民病院小児
外科)

坂野 忠司・永山 善久
山崎 明・小田 良彦 (同 小児科)
内藤万砂文 (新潟大学小児外科)

多発性肝血管内皮腫に対して数回の血行遮断術を施行したが, 鬱血性心不全をコントロールできず失った。反省点を含め報告する。

症例は, 在胎39週, 3,460 g, 帝王切開にて出生の女児。生後2週頃より心不全症状が出現し, 生後40日目に紹介された。心エコー時に多発性の肝腫瘍を指摘され, 諸検査より多発性肝血管内皮腫と診断された。直ちにステロイド療法 (prednisolon 20 mg より漸減投与, 27日間) を開始したが効果なく, 左右肝動脈を結紮した。直後より著明な改善を見たものの, 1週間程で側副血行路が発達し再度心不全状態となった。その後2回の血行遮断 (2回目: 内胸動脈, 左副肝動脈など, 3回目: 左横隔膜下動脈などの側副血行路に対して) を施行したが, その都度血行遮断の効果は持続せず生後6カ月鬱血性心不全にて死亡した。

血行遮断に際しては, 術前に十分な検討を行い, 門脈を除く全ての流入血管を1回の操作で遮断することが肝要と思われた。

24) 女児低位鎖肛に対する Modified Nixon's Inversion Proctoplasty

山下 芳朗・増子 洋
魚谷 英之・広川慎一郎
唐木 芳昭・田澤 賢次 (富山医科薬科大学
藤巻 雅夫 (第二外科)

女児低位鎖肛に対する術式は, cut back 法と Potts' anal transplantation が最もポピュラーであり, 機能面ではいずれも問題はないと言われている。しかし前者では肛門の位置がいわゆる“まえつき”となり, 後者では術後の粘膜脱が問題となることがある。

我々は両者の欠点を防止する術式として, Nixon's Inversion Proctoplasty に準じた方法を3例に行った。術後, 創部の安静を保つために, ギプス固定などやや煩雑な点もあるが, 非常に良い方法と思われたので若干の反省・改良点を加えて報告した。